



集義外書序

和44

361
門口白13
也す和書、もとよ世よりられて外書、いよいよ古文
思ふべく、和書がて、學を日新し、また論述、其を究
めりとも、毎年多く、外書ももとて、經世沿敷の事よ
りて頗る、其の立澤とわざからぬものと、やうの流秘
書を以て、これをもと、其をもと、外書の道融——才をあきらめ
仕へ、且ちうりむかんとあらまじて、持ようりもむらひ、予
嘗ての仇のゆうりと、どうなり此書載つまみ、あら人のがむらは

寶永庚寅初夏下旬

書歸山知常謹啟

集外書卷一

削簡

一幼鳥とモリモミジンヒハシ印
人上巻 一 そよごく道行と見
まゆ毛見紅葉も毛もあはれ
時よ活て毛もひき
クマと首根とく
を失へ ゆ里を向ひ
はよ家向きもよらきへあまきと首事とれ大見と
ゆきとアソガムレシテ
失さんとあまきと首事とれ大見と
首事とれ大見と
天地のうよとあめのうよと
人上巻一家よ滿ねきは舌とさす
をうる人上巻道行

有と歎息せしむれり。おもてはるゝ事也。其地はすけ
まとは皆是事。

一幼君よれを教へ。は歎歎とおせらひ。君の礼教
とおもてじ。おせらふるのあくとおけ禮義とお身ま
べ。せみことかく成化や。おまつまくうちゆ。うきち
むよ寝とくらむとくらかの役者とくつて。至徳法實のうき
行へたまく。一帝の健者。拳者の上ぢきあくとがく。うき
て。手折紙。一切の用よ。立てまく。うきすべ。

一人公生のなまく。うねく。あまく。一若生うきは。思
い。こくもの。是れ。神の御代。は天地の健昌。とうり。

糸竹の樂と。人をと。遁。あそば。あらか。邪能と。モモタ。アリ
今。琴。琵琶。和琴。箇箈。草葉。左鼓。右の樂。アガ
樂。アハ。箇。琵琶。斗。うり。一。音。も達。も。は。一人。演
て。も。も。し。も。の。う。り。箇。琵琶。も。達。セ。ア。レ。二。人。因。強。な。ま。は
あ。ア。シ。よ。た。も。の。樂。の。極。古。の。初。を。吉。津。よ。き。の。所。と
左。箇。の。せ。う。と。お。う。ア。幼。か。わ。と。な。ナ。ト。と。教。人。と。座。
う。も。お。と。お。も。や。く。お。も。の。と。ま。中。よ。ち。よ。是。お。も。の。あ。お。は
あ。お。と。お。も。お。も。の。あ。お。と。お。も。能。を。ほ。は。萬。が。お。と。お。も。の。お。
黄。源。草。の。ま。告。管。弦。ま。ア。た。う。奥。引。の。お。伝。陣。の。う。う。う。う。う。う。

モ。水。戻。て。既。管。弦。ま。ア。た。う。奥。引。の。お。伝。陣。の。う。う。う。う。う。う。う。

モ。水。戻。て。既。管。弦。ま。ア。た。う。奥。引。の。お。伝。陣。の。う。う。う。う。う。う。

一幼少の弓馬練習に於て、左足を負ひて、右足をも失へり。馬
が馬から転げ、矢を腰袋に付けてめさし腰のうどにて、転びて馬から
落つてからやうと起立べ。武藝より廢するを免るる如き武士の如て
武士よ併て、まことに死ぬ所のためば、一月の間も座とぬるもの也
（そく仰はゆる人有やうよむべ）（十六七年、ち馬よま
有する人多からず、今三四年よ一生もかねばやうやく、武藝の所
を經營すだらん。してまことに、甲陽軍體よけ道ばとあり
云きて、我らの心をなほすと有り、武道と武藝より得る財、我らのす
而（ま）とぞ歎美すべ

まことにあらわす所の如く成る人をすこしも見ゆ
本附もうやうやかにアリて多ぬ。一、お齋をえりてはきづく本附
そぞらもよしもの多きは一時うそとて御うそとて、幼君のよ
のあつりそあつりすれの心うそとせんざくをもて、吉方ちく
そぞらもよし思ひもじ。此故すとお齋のよし文もよし達
者ありて是れもよし。外合戦のよしのうちで文通ようも
をよどかかかへりあり。一人を今能くよしへり。成る人をす
きぬよきうりて多べくは八事より十六の事事集をよしよ
只今よろしの如形。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一算板才智を長じて藝の才人中の中、たゞ此
が君らぬものかと思ひや、さうまであるやうな事

よ／＼への良き事のとれははとくして平生高人の利
害のあはれとはまづき今も筆致と筆を利害とすと
すと筆致と筆致と筆致と筆致と筆致と筆致と筆致
筆致かとはむ風流なるものちじかに幼子するべうらゆ
ヨリニあつて一あは幼子よそひも二世の慶とあせ
ナセハ後もとおなめきのこゝへとまのくわくとくわく
あやうりやうりんかよれとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
利根の毒氣と見と見と見と見と見と見と見と見と
時々あらわす見と見と見と見と見と見と見と見と見と
すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
あらあらよおとと絶のまづ見輪のやう見輪とわらとねとえく
りととえくとえくとえくとえくとえくとえくとえく
馬と馬子の父子波才馬と時とよしん平と下と一連を力と流のと見
筋のほのかんと二流と流もあると一とて志高もと夢また
模古の志高もと夢また一おとす別て強打刀、其首猪とく上を
ても才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
ものと才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と
才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と才と

人をまのめらばせうて年と
法華三昧をして夜と神門はうな寝ぼけのやうり
筋骨ゆくやうめて病とあらず神社内は多くて利根鷦^{セイ}翁の神
力羅山とは生れとすと買ひあらえの稽きとたまの燈とまわ
ゆえのくわめて今のふく井とあらわすくわへ
一書略新年のはあのむくへゆきとくわへ
用意といふあらべりうんや

仮書略とくへ志事人あらはすとくわへ
まこととをゑりてき人の目とくぬねよかつあらへ
徳人のゆすとくへやくへ門家よろこびく家老ね
筋目あら人の邪魔なうとなくへと教化へとあらわす
から筋目のは人は店のゆきとありて位のゆきとくわへも
きは喜まざるにまかと所ありともえとす人并なきはもじ
人もゆくへ人とゆくへかゆきぬとり金と功とへはくま
らもゆくへあらううくへつゝの人の微^ヒ賊^ヤあらは
まなえゆくへ人力のゆくへゆく

一書略終分よ培養をすとあり又山林とくにて達^{タツ}めとまやく
とやがくとくへゆくへゆくへゆくへゆくへゆくへゆく
医書略三十年はくよ培養のゆくへゆくへゆくへゆくへ
のゆくへゆくへ農のゆくへゆくへゆくへゆくへゆく

塙のほ山やる年。せのや。か。く。うんとたまは畢。は塙
あくやきぬはまももは塙もやもももももももももももも
二箇。と減。人の速。よ刃。へうもん。あふりて。うもる。まち
ともは山。塙。と多。あくやき。す。か。だら。又。人の速。よ
萬。塙。四。あ。川。の。様。あ。の。ぬ。ち。え。年。以。前。は。二十。倍。なり。む。
一。度。う。わ。る。そ。の。は。今。は。十。度。も。わ。と。は。よ。う。度。よ。大。事。と。せ。た。つ。を
く。が。た。と。是。と。是。今。の。十。か。一。と。も。人の。速。と。は。塙。厚。
塙。も。の。と。の。山。林。と。山。林。と。大。手。と。と。山。林。も。の。わ。し。嘉。義。育
み。と。老。化。の。と。よ。ふ。さ。す。の。と。よ。う。き。化。の。と。よ。う。き。化。
を。山。川。と。表。ア。タ。キ。と。山。川。の。神。え。の。と。ま。と。も。　ぬ。と。水。三。毛
ミ。ト。れ。ア。ヒ。と。本。有。附。と。神。え。う。ん。と。あ。う。足。附。と。神。え。た。と。あ。で
ま。と。お。と。と。づ。き。ち。う。す。テ。　志。う。の。な。し。此。石。草。を。あ。さ。き
山。と。山。川。と。川。中。よ。ね。う。ま。す。た。ぬ。物。も。た。あ。草。よ。水。を。ゆ。く。と。と。古。里
あ。ま。は。山。川。中。よ。入。く。川。と。こ。ち。も。な。り。と。大。海。と。あ。く。と。あ。く。業
を。ま。見。よ。一。度。よ。川。へ。あ。あ。あ。川。と。こ。ち。も。も。ば。海水。の。憂。あり。山
の。神。え。う。す。く。山。底。氣。と。あ。」　水。と。生。い。る。す。か。あ。き。ば。年。ま
限。用。あ。す。く。か。あ。き。ま。す。自。由。な。く。波。二。き。皆。山。底。の。地。ほ
も。の。と。減。も。と。増。べ。う。次。ま。と。ち。も。も。と。ほ。く。も。の。ふ。絶。と

詩之序

又を百姓子とぬく致十石三千石焼正とあて次第よりけゆきおど
み石ニ石ツのちよめりとえもあれらもすかと並ぶ合歎して
そくそくまは君と年より月卒しとまとぞうとを年には
アシハラおけ故よまん人をれむけ山本とは景やもの百姓を一度よ
ゑは引ひよまんへゐのとぞせかりと人皆軍士富く有り
はまき者の中と濟すと實むじあつとは事縁の不満てあ
先かとまは四分うち初の農人をもたれを免れか死を免
まかにまよあとより民の事事の法と云ふと一もあらず
かものぬゑよあとより民の事事の法と云ふと一もあらず
太能とて仰よらくに村里よ百姓ねむすくはる所とあたま
云けこそせん兵する樹り云けとがち説ふと云けとをすすみ祭
其事ととまく才の方若人ありてもすまん人の歟人高人とも
さくええの家人人口ねよ田地と云ふと
とよだもと妻ふだい家外よりアソキ煙のきは老臣のそくと
書ひもまくまくは家外よりアソキ煙のきは老臣のそくと
ふたのあくと云ふと云ふのと云ふと云ふと云ふと云ふと
もだくはまくとて煙草と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
作りぬ民のわからずうすうすまくは去年のとおり。る時まほ
歸てまく。年。四年の人源よとくのな見聞とは乞食。

侍士のあつて、竜へ當れば、手をもつけ法をめんは法どま
く立あわせよ。市たまよ絶版とすなりきりと細又今附せざるものあり
かうへりて、火とあへりけりや、よまうとやむとせんく
きこへとよめらひて草の葉を食へて、おもてに絶版とすなりけりと
ちとあへりけり、仕事とそらひとあらと心の義をうちて、海を走れ
人道うけたまう角す道とあへて、おぬすと潤門をこゑもさ
人の子なりと

一 畠山署清太名の大樹忠節とて存せし所にて、まく人
幼少よみゆき家をたのじぬよ仕度。

正書署大樹忠節の天令の行冥加の匂り帝室と活考をきし
幸オの忠子ト無違の人とあらず、先人道とそぞりたニアゲリて
仁愛とて、平民ともくづげて生なほすとぞうべとおもふを
山林とあへ、古人の功とむり、くわくわとあらわの御冥加を滅
しまつて、よるよる御上人よかとあり仰せ人
天令の子たうらゆよ人のよかと天令ある人の人となりて、かふ
ふひの有する人の思ひ、かふあやぢりて、かふと云ひ
一 畠山署世らよねずも、ゆくと又ねどやぬ。ものくは物の
西書署か、かんくまと物づもゆくとよくは凶徴とて、物と
がくとふもかきよかがくと何と云ひかとて、おぬりもすらも

まうることうの妙行とトヨシルと申すてよ今を放ちよ
あひに目もてらぬ者もなし 哉百石にうるそひ百石下三毛
スねあさりとて鳥のものや あそそとてぬるもなぐとまう毛
はねとてぬやもすもむせぬもと吉事へねくよひの鳥の仕合
あまきだしたよゑづひ仏道もと見とて法事持つてア
神也もよその神也と事と奇ねとま 人間の神靈もひの先
支とあきとめへ平人のもとね事とぞもとまきは今はのがま事
神門の壁をかべて奇ねとま 一人の神をえうびす
ノトケ神とめ めくとまて人とあゆみとま皆邪法
うてひまわるのむ行あひと又邪法のものまうひと佐の河
さ二とまく

一 来書署佛ともあても仰あらば初回と達磨牛とく御を
皆人の位に理名とてするものと云ふ仰てある事の
地を清めのむとて聞く神宮の有御とてきい

函書署化法の実もとを法と奇行にのまきとて法けと仰
もととてくまきからうじとてからと先と奇物とたつて人の徳
さり清めともう先とてくまき 世と見習なるものと身見にとて
教りともとをもひとてとま御師 と名利ありとま御法あ
らを詔をとまかがんをだものとあまは 豊岩山の神宮の御
名とま地と名付山神の名と山神の御とまうわ

清あふのれ。色済のたゞき神奈と見ゆ。銀も金を建やうて銀
ものをよみく。初解もす。皆印。一く地あま銀もむ。
のねよおなむ事。毛岩山も切向。一と君東をくふは山神のれう
すく初解はぬよ。山家蓋て済の虎もむく。の十分の一をすく。山神
をうちし見よゆ。地元銀屋の有利。生もねく。帆の虎の威とかる
まことづらひ。

一
朱書墨人とすら方ともやうけの、
もとてゆく

西書界の生の字とては必ずりきらうもと
くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

志摩の御子の事は
もとより、おまへに生鰯を水よきこと
あわやあらうともあく施設をすくはうむ事
あつてゐる事あり
きもとおおきうな
きもとおおきうな
仁を精意なれば食を
くらへる事無し

一本書の外傷佛也の本草と
かの事ぢりもひぬの事体よよりて法家皆因とも有る
行の志もあり其と宣傳するは宣傳の心も勝るあらず
承取つた大功ともいふ

西書界の事もアリヅアリカドモ、今ども

まからうみが事のへりてをひきうとみて傷も佛も亦て佛の教
道の心のものもあつても人ああめり是又せの害なむ。若然おぞ
とあはれ東の人とのまゝをよしむるにとれどもかくいかむつた
仁厚の人勇猛の生身にて卒するにあはれ文事よりて卒する
らぬ西行とさへしてうそよしゆうもうちわのけしきとふま
じりとせぬか。あく。其處ああはせみやめらる人のま
まうりてそ。うそよしゆうもあきうそとおれど自己よ
得ぬめくくひて幸甚なり。

一 東書岩せ人のやうも民の困窮につきの歌。第一
西書岩せ人の歌。西書岩の歌をうり。民の困窮の世の
奢よりまじか。あうき。松十一年寒よりまじか。波せ
そのれああせ。急す。審とやせんとす。はう。よ及ぶ。あう。あ
く。西陽の歎世。松十万人あり。タキ。急も急す。制
かく。く。人のまよ。やせんと仁政。や。太過。行こきひてを人毛
まよ。毛のたく人のまよ。も。困窮。やまと。ひ。

一 東書岩。西書岩。四道。み穀。ひらり。あらん。一。冬年
あきは。知る。妖たり。と。う。を。ま。あ。あ。ま。や
西書岩。冬年。宵通。のち。四道。た。ま。ほ。え。ふ。ひ。か。み。穀
今く。あ。み。す。ぐ。一。因。其。ま。か。と。わ。む。と。わ。す。其。ら。も
一年。だ。と。冬年。は。松。年の。山。よ。す。ま。ほ。か。ま。そ。る。の

豈幸とぞりてあんどの後
後事もあらず
是とぞはつてから宋もとて之
後へり後武士
奈は下るに同車一ノ

一
處書寫老先生多能受用
也
要到那時

事あつておもひをあれとまへ
喪禮と仰せられどあくも喪
哀感をかづく事と御教と申す天子の高きより庶人の
胸にあよみやうて敬哀廟の宣へらむ所蓋へ
ふゝと旦家の有をよもよもする事のみ又もの有をともうことなか
思ひ小もくとばれゆくら歎地歎くと人多中事あ

死とまわるをも今日年をかえてあり
松竹へまよひ、場所の道をひく人の棺櫬、何處をとぞ
とも害ゆるからむかし人の死とあらざりゆもとうと
あはれ天子よ遺のりるよき通法よりなりが
魂をもたらすより虛中よりありけずとふま
歸れ河のむなりすまやくよもうちめうらぎとくらげ
孝子の心よ取の仰とあよ土中
のももももももももももももももももももももももも
ゆけます。ゆすすけたり煙となすた可し生てぬはめの爲ま
義よ害なれどもは夙夜よももももももももももももも

くよんともじめよめの人のことわざもあらわす
の義とぞもうる。我も神代より月けれど、圓の有を
けるものか。日やあやう道行しまきて儒法のよせば
蜀ちのくさづらて。貧乏のよは根とくは貧乏
じて。もれ。そひはやまうすり實せむ文もて方民
喪祭の礼のまじは詮。うるやく。喪の儀法あり喪
祭の法易と易簡なり。そひよからむとくらふの間
うりあるあれとまじは詮。國のゆとまじは詮
左下よめり。そひまじは詮。まじはゆの身内に敬まし
オの衣服を分とす。年生するものとそとれどりふ。世の主者
の喪祭をしとぬ。通事の儀を肩に負ひ。通
せめり。我申華北礼と易簡。一例へまじは
信せめり。通のり。まじはすと考へ。後の事と仰も。そ
一筆も墨を免はぬ。いはれ高の私欲。いはまを免ひ。
もとある者の中より。およそも。情すを考とせん。其
な者あり。——。王室の流とゆきのゆても。四行。行ふ
事が人の知るゆれ。人虚就遣とくあり。先て。詮を行らゆる。當
育べき事。

近事多忙。人をさう承りぬ。は方とはまことに。まことに
北向す大河。て多水となり。よ。予の心の穀場よ

もあらゆるときとも思はぬ事であつてかくのとてあらわすが
の天神も詠よどりかまされ候すをかくのとてわざがあつてかく
古の人のねづちあひかれた所も内なかつてお見えなほのうに書
物を飛とまうとさへ思ふもあらば此造物の多くはあらゆる
うちのこなう是福のぬきうりうてかくは静なる月とんじ事、かくの
幸うれしあんや其と予病をぬて後鳥氣力乏しくいを死かくと
今ううと死す。造物の萬物、アラシカモのぬるもので教え
道とまでハタよ死す。もしかれどもかくは書の一章ともさ
すく足熱の文幸なりたゞも含みたりたゞもかくは生身
實なう次鶴羽とぬの病根よ。長くて強勢なりをうす
因厄にて肉よかアミと油と幻によせ、幸甚だ
來書署はひあうり外公字高のやひ、せうりは佛多とあらへ佛多
キアラクとあらひ。市井の中そもをまとひて是追々
も佛考む是を欲むす。佛を追るの名もなし。先ももじ
あらゆるを講内義論。多を變へて佛をそとあすけ
人のやうに。もじらす。人席中す。ハ何をやと考えゆ。佛多。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多
人席中す。ハ何をやと考えゆ。佛多。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多
付く。うちを生む。まうまう。佛多。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多
歸む。まうまう。佛多。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多。天下の多者。佛多

もく佛と返るゝの先をも人より帰らずを儒宗の地よゑく御處
あるべし。トヤハシゆきと云ひて是と仰ぎたまは孔子の歎うて
云て一矢仕し

さひゆを名とみえを竊えうもぢうちものよし早彦は前の名ハ利
俊あら支よひ承後の名ヒ利ハクシ孝子君白良女友愛拘候仁勇義
なる事ナシと後世の名トヨタクナシ

中身の内に所なり名法にて之を覆へて凶日すむたる
事あれば必ず之を戒めん人を有さざりやうがこの
事は人を殺す何とぞせらるはれ全を勧めん乞死を傷害を
すかまつてあるきとヤニホレ一物也

西書署は勘定うけすの上益を仰せまらすと云ふ家とは公家家
あり武士士官より傷者を傷者口に有り予も傷者家
をもあらずとこそすら無人のまゝ人傷を仰ぐよせんとか
くまつて平あるが人をきく何のひどいも有

也

一 東宮宮主身印

の主を身印にて下が従者又ア後も身印の長久なるもの
は不長久也身印を差すなくとも後も身印の者を身印を
いふとなづく

西書署清世身印

者印をもよ其中と云ひ柔らかてもあくまで身印の事
柔らかにて身印三向すと云ひ又云ひ又云ひの太印を身印と云
さふる人にて太印一小印を身印と云ひけほひ耳印と云
て久々印を身印と云ひ四條の印と云ひを道の身印と云て
いふ例く御ゆゑやる礼財と云ひ樂印を以て勝利の身印と云ひ人唐
財度と通して式やりなよ紀綱のをすり有く札儀と云ひ

天下萬物とキリ
利と利と天の眞理の
うつす日月の代門を
めくらひてまわるは波打
めくらひと風の又母うりとアキラ
西とヨリも音と見る事と樂てめどもくらみのじんせきに往ある
ものさうい民半ナト位あき度へし後せのゆきあら音の教すく
若のあくさかくそく上行儀法にてト寵をかよる事無く
トふ後尼法よりおくれて後どくたる服や皮け皆しつちの意思
ありシキミタニシキモト也ぬきものゆくルとモハシ
ニニ助のきの西阿マセハ助のゆきの西阿マセハ助のゆくルとモハシ
ヤと赤脚入まゆゆりゆきりと小御入事すくル
族儀を大死
儀嚴うは家ゆの士因病を
今大死の御者上人政法を大禮
行をすくん大死とまきく死ゆゆくル
身より禮嚴なれど行も易
居居し事と處ゆかおと西とまきく死ゆゆく
安一ひきとまくれまくゆて今町人百姓の生産を以ては承る所
居きりをまくとむとゆくりしゆくりたゞかきああきを左をり
東云内方上とて三十五万石の家中うちもやうやうやうやうやう

是よりて割據を爲す。人食を多めにあらへ
あると罪とは、なんぞ民の又母きらきのたんや先をやるとい
うゆきし

一 来書男は佛法の神通妙用より云ひまことにあらず
佛が人間の如く神妙通力自在なり理あるは勿論事なり
さかなくてやうと云ふ事も其をも基にむなれ候所候て方便三事
事と云ふ皆佛也——而皆佛と云ち也正きて塔の事死ゆつても
云ハ佛と云ふとも法華說法の時のでりゆくをつとう——と云ふ事
事云べき也——と云ふ事も本也も分きて塔も生て多度佛もゆう
う塔ありと云ふ事又塔生きて天と天下唯我独尊と云ふ事と
是を仰ぎて塔の事——かう——と云ふ事も塔の事も塔
さうたると言ひながら又是を寓言なり生色せざる附の心と能も獨
尊なり般迦死廟の附則からりよそもなれど云ハ仮才子の心
——かう——をうちやうは虫の事もよそもなれど有——と云ふ事
事も仰ぎて云ふ事もうを仰ぎて云ふ事もなれども云ふ事も
何も水ならぬ次般迦の仙人よけくよ高き事——と云ふ事
天主南雲うは幻術の事も有り候事——佛法とも済めんわの方便に幻術と
うをうきてくらし塔の事も云ひて云ふ事も塔の事も
立木也——水くもの事も云ふ事——幻術なるもやうと
立ち今の方利支丹の人と云ふ事も云ふ事——幻術なるもやうと

云つてあきばらを経由まほ多難の力も勿く切刀もむき
くるとお詫びと申すものなりてゆきりも云仕ふの力もくわう
の奇妙あやうさつも又精敏の佛心とぞとあります。刀の身とさざら
の身立意の功徳よしとぞとあります。けむれどもて仙翁と生
ゆるあすこともとすまほ法の鏡に西もんては東ともとすが
ともとすめくもくや。せりは角つては先とくひえんや

此書も岩仙術の體も考へなるもの無もありその事は勿論なり
が、見るより如何と意然のゆきへとて佛法のわざりも凡そを
かほよねども心ありとてゆきはるゝと幻術も解してゐる
る所のはえをあまくとも名利有致のゆゑに意然もりとぞうす
て方伎ならぬ後世の佛高名利有致の爲めとぞとて禮節も清
併せりと方伎とあやうに手とては幻術とやるものちもくなかつて
生きはむけのゆきはりかよ幻術とやものちもくなかつて
見ゆれと佛菩薩の通力とのアハてまりとては五體の神奈
かをうやりきゆきはるゝと云ひ神内の理と云ひは五體の神奈
幻術も魔法もさくともきげんは佛教の奇特圓滿の體のやう
と一神理ありする事と云ひゆは在世の時より新加と伝へ
有り考え病かく法度のものとあらわすを考へたきはんを
りと命。居ゆるよあれ程也佛乞食して乞食とありゆはし及
べれり併へてあるのとて汝と申すが如也

是と實———と考へかる——とてゐてりやが」多のとく

ヤ——うきうちを庵念くやの考のとく——とくを續く後心かと

てやうそを寫すとて是山よりあまのあまの山のもとをすば然也哉、

參定也。化けも霞とのゆゑに法寺もゆくも理をかかず附

秋かえ我妻とゆくほんと思ふ無照あらむ所々——ゆくの後心

きくかきてうこそ次——此うん御事とけねうち一そまの御理

きくみゆはうたあくさばとモカのやうもと一停送り

やくおぬたをもと總體をもし人のやうはちくてもすも

うけを代えあへやくらいたゆくも仕立あへぬ——佛家のへり

佛高もと見解きう——其家うてもなきあらゆどもとくらる

——ち風たれ事小氣力と考セ——と猪重也

僧の仕事なるとち伝する武士よ告ぐくミクリとも士の義も三綱事

の内と行もら馬礼樂の義よをも又武二道の士よく名を落せよ

揚——堯神の役人らうきよ下氣——唐大書記の精微と

あ——う内とめれも中庸ようり出の死をうこうもく——何そ

仙体とすゆくらやるよ義すとくめ傍よくはきくよ及をくもくさん

よハ三綱みちとすく、古樹圓を立か——きらえ下の政が取るる(き

士の道立べきうゑとも仙体太極道とさうじめゆ法とかすとく人

らとくと、彼まくつふ附せや——いづんともく——

一本書界は王法佛法車のあ漏る——佛法のこもるふ事すは

王法の行獨車とぞめくらひへや

反書署祐祐代・トモ祐祐道とつを王代とは王道と不思量となら
大歎の事といふ。お論も文或ひくは仁法の輪をもつて奉詔也祐
の源代人王の初めより大道行まし。人氏の化とく。つまり仁
法を説かうてから後王考、武の獨と見て佛の獨と云ふ仁勇
の傳と見て王道たとへてから武をもととす。文もくれ既に奉
君の凡なうは治通をうは傳法をかせの如くとよす。とよ
くふ。祐祐祐祐とぞまく人道の人道をあはれ。もくちよかく
けきとお病とみてより入て祐祐の如く。云ふ。仁法す
あゝもかくふ寮

一 来書署生死の人のものにしあくよ三年の悲哀、恩恵をとる
と
老と三年の妻とれ
と

反書署右人の悲哀、死とがれ、じよあく別とがり、むじよ
りへきをむかうて奥列へけんゆく。文見ともよもれてやじ
へへきをむかうて奥列へけんゆく。文見ともよもれてやじ
りを欲くよあくもくの別と情むじ死生と天地のほじ何
死とれ。さんや。只一生の別とれ。むかうてやじのく別うして
情厚。父子別もえ歸をれもてみ年も十年も鷹くも有りあ
生よ生よも有り死よも生よも死よも有りうて限ひて窮人をも

一
本書略抄高祖之政事之多有得失而
自古以來未有之也

